

意思決定における物語の役割

○藤井聡

(京都大学大学院理工学研究科都市社会工学専攻)

1. 意思決定と心理学

人間の行動, ひいては日常生活全般は, 「意思決定」(decision making) の帰結としてもたらされるものであると解釈することが可能である一方, 意思決定は, 人間の“潜在的”(covert) な心的過程と“顕在的”(overt) な行動の接合部にあるものとした了解することができる。したがって, 意思決定の研究とは一面に於いて行動研究である一方, もう一面において心理学研究である。それ故, 意思決定を理解するためには, 一面に於いて, 潜在的な心的過程を研究する(狭義の)心理学を参照することが得策である。

2. 心理学における物語の意義

心理学は, 人間の心的現象を研究対象とする人文社会科学であるが, “物語”が人間の心理現象において演ずる役割も様々な形で分析されてきている¹⁾。

まず, 人間の認知活動に着目した研究においては, Bruner^{2), 3)} は, “物語”は, 人間が物事を理解したり思考する際の重要な方式となっていることを指摘している。彼は, 人間の認知形式/思考形式には, 「論理実証モード」(paradigmatic mode)と「物語モード」(narrative mode)の二種類が存在していることを指摘している²⁾。論理実証モードとは自然科学に代表される認知・思考形式であり「記述や説明に関する形式的な数理体系の理念」や「一貫性と無矛盾性という必要条件」を特徴としている。そして「物語モード」は「見事なス

トーリー, 人の心を引きつけるドラマ, 信じるに足る歴史的説明をもたらす」特徴を有すると述べている。いわゆる科学的な理解をもたらすのが論理実証モードであり, 物語による感慨や感動をもたらすのが物語モードである。彼は, これら両者は相互に還元不可能である点を指摘している。

そして, 「論理実証モード」は個別事象ではなく, 高度な抽象化によって個別事例を越えて経験的真理を立証しようとするため, その理解や認識は, 必ずしも各人の実体験に直接関連づけられるものではない。ところが, 「物語モード」は時間を超越した事例を個別の経験例へと解釈し, 特定の時間と場所へと位置づけ, “信じるに足る説明”をもたらすものである。それ故, 物語モードにおける理解や認識は, 各人の実体験に関連づけられ, より直接的に, 人間の意図や行為に影響を及ぼしうる。その意味に於いて, 人間の行為や実践において, 「物語モード」はより重要な役割を演ずるものであるという点が指摘されている。

さらに, Bruner は物語には以下の五つの特徴があるという点を指摘している⁴⁾。

1. 時間軸にそって出来事を構造化する
2. 語られた出来事が事実か否かには関心が無い
3. 相互行為の中で生じた人々の「規範逸脱」をうまく理解出来るように説明する(例: 言い訳)
4. 登場人物は一連の行為の背後に独特の意識の動きをもっている

5. 物語の習得や実践は常に「相互行為」の中で、様々な他者を相手にして行われる。

さて、こうした Bruner の人間の認知活動に関わる基本的な物語の役割に関する一連の研究に影響を受けながら、物語についての心理学は様々な発展している。

第一に、Gerge & Gergen は、自分とはこんな存在なのであるという“自己認識”は、物語的に構成される、という自己物語論を主張している^{5), 6), 7)}。ここに言う、Gergen 達の「自己物語」とは、「個人が自分にとって有意味な事象の関係を時間軸にそって説明する事⁵⁾」である。つまり「到達点、すなわち有意味な終点を設定し、その終点に向かって諸出来事を取捨選択、そして配列する」⁶⁾という過程を経ることで、語り手の人生には一貫性が与えらると共に、現在の生の“意味”と“方向性”の感覚がもたらされることとなるのである。

第二に、Schank & Abelson⁸⁾ は、認知活動の中でもとりわけ重大な役割を担う“記憶”において、物語が果たす役割を論じている。彼らは、ものごとは物語としてしか記憶され得ない、と主張している。記憶は“語る”事を通して定着し、また変容もする。人間は“語る”際に自分の思う結末に向かって、また人に受けいれてもらえるようにその文化や社会に存在するひな形 (skeleton) にそって物語を構成していく。

この際に、物語は抽象化され、短縮化の行程を経て形成されるため、詳細な部分が抜け落ちてしまうのだが、その抜け落ちた部分は、物語の一貫性を保つ形で、そして物語の結末や物語によって伝えたい感情・内容に合致するように構成されていく。こうして構成された“事実に関する記憶”は、しばしば、当の事実と必ずしも一致しないという事態すらが生ずることとなる。こうして、語られた物語が記憶される際には、より単純化する為に“索引化”される。

そしてその索引化は信念（例えば、UFO のような存在に関わる信念や、イデオロギーに関する信念など）の影響を受ける。何故なら、物語するという行為は上記のように絶えざる取捨選択と構造化を行うものであるが、そうした取捨選択や構造化は、彼の信念に基づいて、あるいは、信念を擁護する方向へ向かって、なされるものだからである。

一方で、それぞれの物語の方向を規定していく信念もまた、個々の物語によって正当化され、自身の物語の中に一貫性を保った形で居場所を見出す。そのため、物語と信念は「循環する関係」にならざるを得ない。

彼らはさらに、この様にして形成された“索引”の概念を用いて、“理解”とは何かを論じている。彼らによれば、そもそも“理解”、つまり“分かった”と思う、“附に落ちる”という認知活動は、理解の対象としている“物語化された出来事”が、彼の“索引”のいずれかに合致することなのだ論じている。ただし、人々はその“合致”つまり“理解”が“正しいのか否か”を確認すべく、正しく理解出来ていると見なせる追加的な証拠を集めようとする。そして、正しく理解したと考えれば考える程に、その“理解”された新しい物語は、彼が持つ“旧来から知っている物語”、そして“信念”や“索引”のかたちにインパクトを与えることとなる。

この様に、個人の記憶や理解といった認知活動に物語は決定的な役割を担っているという議論に加えて、複数個人が関わる“共有認識”にも重大な役割を担っているという点が、Miller⁹⁾ によって指摘されている。これが、心理学における第三の発展的理論である。彼は、物語は個々の人間にのみ存在するものではなく、社会やコミュニティにおいて共有されている事を指摘している。しかも、社会的に共有された物語は個々人が新たな出来事や知識を解

積するための“起点”となるものであると論じている。それ故、社会的に共有された物語は、その構成員の個々人の意思決定や判断において何を重要視して何を捨て去るのかを指示することとなるのであり、これこそが社会的に共有された価値観の本質であるという点が指摘されている。また、物語はより簡潔な表現と結びつくため、物や行動やしきたりが物語の見出しの役割を果たすようになり、伝える機能や記憶を強化する機能を果たす。それ故国旗や国歌や像や公共の建物やシンボルマーク(例えば、ハーケンクロイツ等)は“国の物語”にとって何が重要で何が重要でないのかを表すこととなる。

なお、こうした物語の社会的共有は、職場などの具体的な集団における“新人研修”において重要な役割を担っていることが、Lave & Wenger¹⁰⁾によって指摘されている。

3. 意思決定における物語の役割

以上、心理学における物語の研究についての主要な系譜を概観したが、こうした議論が、意思決定にどのような含意を持っているのかについて、以下に改めて論ずることとしたい。

まずに言えることは、意思決定理論において一般に言われる「選好」(一般用語で言うところの好みに対応するもの)は、当該個人が自分自身や過去の記憶や社会の諸現象などを理解する際に構成する傾きが強い「物語」に依存して構成されるものと考えられる。

理由は以下の通りである。

第一に、Gerge & Gergen が主張する「自分はこの様な人間なのだ」という「自己物語」は、その個人が何らかの選択場面での意思決定を行う際に、その「自己物語」に協和する選択肢を選択する可能性を増進させる一方、協和しない選択肢を選択する可能性を提言させる働き

を持つと考えられる。例えば、「自分自身は、派手な人間だ」という種類の自己物語を持つ個人は、洋服購入の選択場面で、派手目な洋服を選択する傾向を増進させるだろうし、逆(すなわち、“地味”な人間だという自己物語を持つ個人の場合)もまた然りであろう。

第二に、Schank & Abelson の認知についての物語の役割の議論を踏まえると、「特定の因果律」という「特定の物語」が、意思決定に多大なる影響を及ぼすことが予期される。例えば、特定の原因Aによって特定の結果Bがもたらされる、という一つの因果律についての物語に慣れ親しんだ人は、逆にこの帰結Bを得るためには、この原因Aが必要である、という事に思い至る可能性が高い。したがって、帰結Bを得るという目的を持った意思決定局面では、その原因Aに関わる選択肢を選択する見込みが高いものとなる。ところが、そういう「因果律についての物語」に慣れ親しんでいない人は、ある帰結Bを得るためには、原因Aが必要であると考えられる傾向が低下し、その結果(帰結Bを得ることを目途とした局面に於いて)、その原因Aに関わる選択肢が選ばれる傾向が低下するものと考えられる次第である。

第三に、Gerge & Gergen の主張を拡張して、人々が抱く「ある特定個人はこういう人物なのだ」という「他者物語」や、「ある集団はこういう人々なのだ」という「集団物語」の存在を想定するならば、そうした他者や集団との相互作用の局面において下される意思決定は、そうした物語が多なる影響を及ぼすこととなることが予期される。特定他者との相互作用の局面では、その人物について想定している「他者物語」を用いて、その人物の行動や反応を予期するであろうし、かつ、そうした予期に基づいてこちら側の行動についての意思決定を下すものと考えられる(なお、そうした意思決定は、

さらに、その他者が、その物語にそって行動することを促す効果をもたらすこととなろう。そして、当該個人の「予測が実現する」ことを通して、その個人が想定していた「物語が現実化する」事となるものと考えられる。

以上、物語が意思決定に及ぼす 3 つの影響 (①自己物語にそぐう選択肢が選択される傾向が高い、②因果律という物語が各種選択時に何が生ずるかの予期を決定付けている、③特定他者や集団について形成された物語にそぐう選択がなされる) について述べたが、これらの諸議論は、次のような命題を共通に暗示している。すなわち、人々は、予め持っている物語の一貫性を保持する方向の選択肢が選択される傾向が強く、一貫性を破壊する方向の選択肢が選択される傾向が弱くなる、という傾向が強い、という命題である。自己物語や他者物語、集団物語に「そぐう」選択肢が選ばれることで、それらの物語は強化される一方、それらに「そぐわない」選択肢は選択されなくなっていく。また、特定の因果律の物語に基づいた帰結判断を行い、それを踏まえて意思決定が下されることで、その因果律が再現されることが確認されていく一方、想定されていない因果律の物語は、それを確認するための選択肢が選択されなくなってしまう、その真偽の程が確認される機会が失われていくこととなる (例えば、現在の日本がこれだけデフレ不況に苛まれているにも関わらず「ニューディール政策」が実施されなくなったのは、こうしたことが背景にあらう)。

なお、この命題は無論、認知的不協和理論とも整合するものであるが、その相違は、認知的不協和理論では、「認知」という静的な心的表象を想定していた一方で、以上に論じた議論は、「物語」という「時間軸を前提とした因果律を持つ動的な構造を持つもの」を想定したものである点に、大きな相違がある。

なお、こうした「物語」は一定普遍なものではない。Schank & Abelson が論じたように、それぞれの物語は、その物語と協和しない事実を現実体験することを通じて改編されていく可能性がある。無論、上述した物語に関する一貫性保持の傾向が存在する以上、そうした物語の改編の契機は必ずしも日常の中に大量に埋め込まれているとは言い難いも。しかしそれでも、日常生活の中に様々な形で少なくとも潜在的には埋め込まれているものと考えられる。したがって、人々が所持する、あるいは信ずる物語は、常に改編されていく可能性を持つ、動学的な存在であると考えられる。

4. 「物語」を踏まえた行動計量について

以上、「物語が意思決定」に及ぼす影響について述べたが、いずれも極めて非計量的な議論であった。

しかし、意思決定そのものは計量的に取り扱うことが可能、あるいはむしろ容易な心理学的あるいは行動的な現象である以上、それを計量的に取り扱う上で物語を計量的に導入していくことも可能であると考えられる。

ただし、物語を直接計量的に取り扱うことは困難であることは間違いない。したがって、可能なことは、「複数の物語」を十二分に主観的に構成しうる分析者を想定し、その分析者が様々な個人の様々な物語を「主観的」な観点から分類し、0 あるいは 1 となるダミー変数を用いて、各個人や各法人が所持している物語をパターン分類し、そのダミー変数を、何らかの意思決定の説明変数として導入していくという方法が最も素朴なものとして考えられる。

今後は、何らかの目的を措定した上で、こうした議論を踏まえて意思決定と物語との関連を計量的に分析し、その上で定性的に議論していくことが必要であると考えられる。

参考文献

- 1) 藤井 聡, 長谷川 大貴, 中野 剛志, 羽鳥 剛史 : 「物語」に関わる人文社会科学の系譜とその公共政策的意義, 土木学会論文集 F5, 67 (1), pp. 32-45, 2011.
- 2) Bruner, J: Life as narrative, Social Reserch 54(1), pp. 11-32, 1987.
- 3) Bruner, J: Acts Of Meaning, Harvard University Press., 1990 (岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子(訳)「意味の復権 フォークサイコロジーに向けて」ミネルバ書房)
- 4) Bruner, J: Actual Mind , Possible Worlds Harvard UP, 1986 (田中一彦(訳)「可能世界の心理」みすず書房)
- 5) Gergen, K. J. & Gergen, M. M.: Narratives of the Self, In T.R.Sabin & K.E.Scheibe (Eds.), Studies In Social Identity, Praeger, 1983.
- 6) Gergen, K. J. & Gergen, M. M.: Historical Social Psychology, Earlbbaum, 1984.
- 7) Gergen, K. J. & Gergen, M. M.: Narrative form and the construction of psychological science, In Sarbin, T.R. (ed), Narrative Psychology, Praeger, 1986.
- 8) Schank , C. & Abelson , P.: Knowledge and memory ' , In Robert S (Ed), Knowledge and Memory : The Realstory, Lawrence Erlbaum Assoc Inc, 1995.
- 9) Miller, P.J.: Personal storytelling in every life: Social and cultural perspectives ' (Eds.) Robert S, knowledge and memory : the realstory, Lawrence Erlbaum Assoc Inc, 1995.
- 10) Lave, J.& Wenger,E.; Situated Learning : Legitimate peripheral participation., Cambridge University Press, 1991. (佐伯 胖(訳)状況に埋め込まれた学習, 産業図書)